

『歴史と歴史上の人物の学び』～『進歩の要件』～

2026年6月26日、【ひばりが丘駅 → 渋谷駅 → 高井戸駅 → 『杉並検診プラザ』 → 高井戸駅 → 吉祥寺駅 → 御茶ノ水駅 → 『順天堂大学』 → 本郷三丁目駅 → 池袋駅 → 『病理組織診断業務』 → 池袋駅 → ひばりが丘駅】の『駅の旅』となった。各駅のロビーで、多数の歩く人の顔を見、まさに『個性と多様性の風貌の観察』となった。『病理組織診断は、顕微鏡を見て細胞の多様性の学びでもある。』これが、『病理学者の役割と使命の心得』であろう。

筆者は、医師になり、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、大きな出会いに遭遇したのであった。病理学者であり、当時の癌研究所所長であった菅野晴夫(1925-2016)先生は吉田富三(1903-1973)の愛弟子であり南原繁(1889-1974)が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、【『吉田富三と南原繁』の風貌、人となり】を直接うかがうことが出来た。また、南原繁の後、東大総長となった矢内原忠雄(1893-1961)も学んだ。

2018年『がん哲学外来10周年記念 矢内原忠雄記念 本郷通りカフェ』（ゆい訪問看護ステーション 於いて）赴いたのが鮮明に思い出された。2008年 順天堂大学での『がん哲学外来』から街の中に出て『がん哲学外来カフェ』を展開したのは、東大総長を終えた矢内原忠雄(1893 -1961)が 胃癌となり、夢果たせなかった想いを込めて、始めたものである。筆者には、特別な思いがある。【『がん哲学外来・カフェ』は、歴史と歴史上の人物の学びの 具象的なテーマ】でもある。

『吉田富三(1903-1973) 記念福島がん哲学外来』（福島県立医科大学付属病院腫瘍センター がん相談支援センターに於いて）は、2009年にスタートした。【がんと共に生きる意味とコツを、樋野先生が先人達の知恵を紐(ひも)解き一緒に考えます。】と紹介されている。2004年にスタートした南原繁研究会【初代表：鴨下重彦(1934-2011)先生(東京大学名誉教授、国立国際医療センター名誉総長)、第2代表：加藤節先生(成蹊大学名誉教授)】の3代目の代表を、2019年 南原繁(1889-1974)生誕130周年を祝い仰せつかった。

【切れ目のない努力こそ『不連続の連続』】である。これが、新渡戸稲造(1862-1933)が言っている【『ビジョン』は人知・思いを超えて進展し、『進歩の要件』】であろう。【歴史を通して 今を見ていく『人物』出でよ!!!】である。